

比較思想の進展

中村 元

ただいま、三枝教授から誠に鄭重なお言葉をいただきます。恐縮に存じます。

この度、我々の比較思想学会では、第十三回の学術大会を開催することができました。誠に同慶のいたりに存じます。年々歳歳、学会は発展いたしてまいりましたが、殊にこの度は、国立大学としては最初のケースであります。この筑波大学におきまして、盛大に開催されますことは、誠に慶びにたえません。これにつきましては、たいへん大勢の方々にお世話になりましたけれども、殊に比較思想をすすめていらっしゃる三枝充恵博士が、熱心に計画をお進めになりました。さらに、その他筑波大学ご関係の教職員の方々が熱心にご協力下され、また他方では東京の本部の方々、あるいは全国にわたる会員の方々の熱心な協賛によりまして、このように盛大に開くことができました。誠にうれし

く存じております。今回の開会は、そういう特別の意味合いがございますので、三枝博士から特に依頼がありまして、いままでも国立大学で比較思想に関して少しづつやりかけては失敗し挫折しまた進めてきたという、そういう経過を特にご参考のために申し上げてくれということでございますので、そこに重点を置くことになるかと思いますが、その点もご了承をお願い致します。

考えてみますと、思想の学問、殊に哲学というものは、内外を通じて今受難の時期に遭遇していると思います。ご承知のように、我が国では長い歴史的伝統を誇る由緒ある立派な雑誌が廃刊になりました。海外におきましてもいろいろの現象が見られますが、哲学の本来本元と見られているドイツでは、チュービンゲン大学で哲学の講座を一つ廃止して自然科学に向けてしまうということをしたそうです。これはドイツの学者から聞きました。ヘーゲル

が講義し、またインド哲学の方ですけれどもグララーゼナツプ教授などもインド哲学を講義された、あのチュービンゲン大学のことです。これは言わず語らずのうちに、哲学的な学問に対する世の人々の批判がそこに現われているかと思うのでございます。

翻って我が国ではどうだということになりますと、我が国における哲学思想の研究は、これは前から私が申し上げていることでございますが、率直に申しまして、生体解剖を行うようなそういう研究が為されていると言っているのではないかと思うのです。全体の傾向として見ますと、問題を取り上げて深く追求するというよりは、むしろあちこちの学説を紹介する。極端にいったら、鸚鵡の学問だと言われても仕方がないのではないかと。

我が国の研究も決して最初からそうではございませんでした。その一例を申し上げますと、明治二九年七月に東京帝国大学文学部大学の哲学科では、故村上俊江氏の学位論文を受けつけてそれを認可しておりますが、その卒業論文は「ライブニッツ氏ト華嚴宗」という題です。これは、川田熊太郎博士のご功績を記念した『華嚴思想』という書物が法蔵館から出ておりまして、それに掲載されていますから、それをご覧下さい。「ライブニッツ氏」と書いてある。これでもう時代色が出ているわけですが、それを見ますと、所論が非常に粗雑です。ドイツ訳から全部引いている。それから、華嚴思想といっても漢文の書物から引用されているわ

けです。しかし、的確に問題をとらえようとする意図が見られるのです。

翻って現代ではどうでしょう。こういうような卒業論文を書いた場合に、今の大学教授はこれを通してくれるでしょうか。すぐ難癖をつけてこれを落とすに決っています。しかし、思想をとらえるという努力から言うところ、明治二九年の人の方が真剣であったということが出来る。外国の例を見しても、たとえば、ウィットゲンシュタインがこういうことを言っております。「将来の出来事を、現在のそれから推論することは、できることではない。因果関係への信仰は、迷信である。いわゆる意志の自由は、将来の行動をいまから知ることではできないという点に成立する。」何でもないことを言っているわけですが、そこから彼は、こういうことを言うわけです。倫理学というものは哲学から独立しては成立し得ない。「それゆえに、倫理学の命題なるものもあり得ない。およそ命題は、より高きものなどを表現することはできないのであるから。」そこから彼は次のような結論を導き出すのです。「倫理学は、明らかに、言葉には出せぬものである。倫理学は超越的である。倫理学と美学とは一つのものである。」彼によると、倫理学と美学とは一つのものである。結局、倫理学も美学も、彼の言う論理的哲学的 (logico-philosophicus) の範囲から出ないものなのです。そこに皆納まってしまうのです。そうだとしますと、基本的な位置づけというものを忘れて倫理学や美学を切り離

して考えるということは無意義になるのではないでしょうか。このような切斷は日本の学会にだけ見られる現象でございます。近代に至るまでおよそ独創的であつた有意義な思索を残した学者というものは、みな人間にとつての根源的なものと取り組んでいる。だから、狭い意味の哲学者でもあれば美学者でもあり、倫理学者でもあり宗教学者でもあつた。そういう人が圧倒的に多いわけです。ところが今の日本では、その一面だけをとりえて論議している。結局むこうの言つたことを、横に書かれてゐるものを縦にして紹介するということに尽きてゐると言つたら過言でしょうか。

さらに、地域的に切斷するということも無意義である。この点で参考に出ることは出来るのは、言語学における問題意識だと思ひます。一つご紹介致しますが、服部四郎博士が大野晋教授と対談をしておられますが、その中でこういうことを言つておられます。ちょっと長いのですが、「私は言語学者だから日本語は知らないというのがありましたね。これは全く間違ひです。言語学者であつても、日本人である以上、日本語が一番の関心でなければならぬと思ひます。ただ不思議なことに、外国語を勉強すると反つて日本語が良くなるということがあります。知識は広いほどいい。外国語を余計知つていれば知つてゐる程、自国の言葉もよくわかつてきますね。」言語学の立場でそういうことが言えるのであります。多くの言語を研究することから「比較言語学」がまず出てきました。comparative philology が出てきた。それ

を通過して、現在では基本的な言語学が成立してゐるわけです。General linguistics が成立した。それからまた宗教の方でも、多数の宗教を研究することから「比較宗教学」が成立しました。向こうでは学などという字はつけていません。comparative religion, vergleichende Religion という名前で作つております。それがさらに進んで、現在では「基本的な宗教学を Religionswissenschaft」という名前で呼ぶことがドイツ語圏ではかなり現われております。英語文化圏では、これに対応する術語はまだ確立してゐないように思ひますが、その方向に向かつて進みつつあるということは疑ひのないことであります。

哲学の研究においても同じことが言えるのではないのでしょうか。現在では比較思想でも、比較哲学 comparative philosophy, vergleichende Philosophie という術語は次第に人々の間に定着するようになりました。やがて、こういう経過を経て、基本的な哲学に人々は目を向けるようになるであらうでしょう。そこで人々が注目して明らかにするものは、それは「純粹哲学」とよばれてゐるかと思ひます。「純粹哲学」とか「純哲」という呼称は世間でも行われておりますが、これは純粹でも何でもありません。西洋の哲学書に書かれてゐることの物真似に過ぎないと言つても過言ではないのではないのでしょうか。殊に言語学の研究にも、「いくつもの言語を知つていれば多いほどいい」と服部博士が言われてゐる点は重要であると思ひます。私たちも異質的な哲学体系を多く知っ

ているほど、視野が広がって確信を持つことができると思うのです。いくつもの異った国々の哲学に通暁するということは、これは不可能であります。そう、人々は言うかも知れない。しかし、哲学と哲学文献学とははっきり区別する必要がある。今、日本でやっているのは、正直に言って、哲学文献学です。哲学ではない。

だから、生体解剖のような扱いができるのです。哲学の問題というものは、どれをとってみても、本来あらゆる民族に共通であるべきことであります。よく東洋の思想の研究のためには西洋における研究方法を適用せよ、それをものにして適用せよと、我々は先輩から何十年にわたって教えられてきたことでありますが、しかしそれは、限定的な意味をもって考えられねばならないことではないでしょうか。ここでついでに、服部博士の立言をご参考までにご紹介いたします。「これはもう私共の年配の者は、今の人はどうか知りませんが、だいたい西洋崇拜で育ってきたのです。

こどもの時から読む物が、雑誌にしても本にしてもすべて西洋崇拜の思想で固まっております。ですから、心の深い根底にですね——尤も西洋は確かにそういう崇拜すべきものではありませんが——だけれども、實際価する以上に崇拜する思想が浸透しているのです。本当に、極端に言えば、骨の髄まで浸透している。私どもはそういうものであったわけです。」ところが博士は、戦後昭和五年からアメリカへ行って視野を広めることによって、ただ向こうの人の方法を採用し追隨するということだけではよくないと

いうことを知ったというわけです。つまり、どこの民族でも心情は同じだということに非常な感銘を受けた。この感慨は、私も大いに共鳴するところであります。将来はむしろ、我々の研究が西洋人の研究方法あるいは価値評価を修正し、反省をもたらしうところまで至るべきではないでしょうか。

そこで、我が国の実状はどうかということになります。明治の時代は、さっきも申し上げたようなわけですが、ところが、大正から昭和になってどうだろうか。戦時中のことを申し上げますと、一九四三年に私は東京帝国大学助教授に任ぜられたのですが、その年あるいは翌年だったかも知れませんが、東京大学の哲学会で講演したことがあります。その題は「バルトリハリに於ける絶対者の觀念」。バルトリハリというのはインドにおける言語哲学者です。インドのヴィトゲンシュタインなどと言われておりますが、それが哲学雑誌に掲載されています。なぜそういう講演をしたかといえますと、その当時の主任教授の伊藤吉之助先生の慫慂によったものであります。出隆先生もそこにご出席されたことを覚えております。出隆先生はその時、こう言われたのです。「僕は君の講演に敬意を表して出てきたんじゃないよ。」先生一流の非常にアイロニカルな含みのある、インブリケーション (implication) のある表現だと思いますが、そう言われたのをまだ覚えております。それから、一九五二年に私はアメリカから世界一周をしてその頃帰ってきたわけですが、池上謙三教授からア

メリカ哲学界の事情を報告するように言われました。その頃は外国に行くなどということはまるで火星の世界へでも行くようなものです、月の世界へでも行くようなものです。というのは、進駐軍が頑張ってまして、進駐軍の許しなり勧めがなければ外国へ行くなどということはできない時代でありました。ですからとにかく、アメリカを通してきたからというのでアメリカの哲学界について話をせよと報告を委嘱されまして、それに応じたこともございます。その時に、池上教授が私にやらせると言われると、岩崎教授は、「中村はそんなことはやらんだらう。」と言われたのです。ところがそのうちに直接に話がありまして、私はどうしようかと思ったのですが、これはやはりひとつ「盲蛇におじず」であえてお引き受けしようと思って、それで一回分だけお受けしました。池上教授は非常に喜んで下さったのです。それが戦後すぐの時代でございます。ところが、その後、どういう具合になったかといえますと、これはもう皆様方のほうがよくご存知でいらっしやるでしょうが。

現在になりますと、狭義の哲学科と呼ばれている方面の人々、それからインド哲学のほうの人々あるいはその他の方面の人々の協力は、どうもなかなか行われていないような気がするのです。私は東大の哲学会の会員にもなっています。否、会員どころではなく、何とかという役員にもなっているのです。それから日本哲学会も、これもずっと会員を続けております。ただ、哲学という

ものが非常に狭い範囲に限られて、他の分野の人々との間の交流がどうも行われていないような気がするのです。会員としてのご通知はいただきます。けれども、ただ「ご出席下されたく候」とハガキ一枚いただいても、これは出やしません。ところが、この比較思想学会の会ですと、いろいろな方々から、今日はどうするんだ、こうするんだと強く言われるものですから、私も喜んで参上いたしましたけれども、そうでもない限り老人はなかなか出る気にもなりません。従って、会も失礼しているというのが実情です。それが良いのか悪いのか、それからまた、どうしてそうなたかということですが、これは、あるいはその事情は皆様方のほうがよくご存知かも知れません。

私は三、四年前でしたが、関西比較文学会で講演を頼まれました。つまり隣組の誼みで来てくれということです。隣組という意味は、似たような志向を持ってやっている人達だからということでしょう。いろいろなことを申し上げましたが、その時、東京大学の哲学関係の指導的な教授の間の意見の、何と言いますか、食い違いと申しますか、ちょっと申し上げたことがあります。ある教授はこう言って別の教授はこう答えたというところを、P教授とQ教授としたのです。あるいは何かその方面の新聞に出たかと記憶しておりますが、その後、東大の教養学部の教授からしきりに追究されました。不審尋問です。P教授というのは誰なのだ、Q教授は誰なのだ。これに私はまだ答えていません。私一人の

胸にたたんで墓場へ行ってしまうかと、そう思っていたのです。しかし考えてみますと、仮にそれらの人々の人格にかかわることだったら、これは申し上げるわけには行かない。けれども学問に關することなら、これは申し上げておいた方がよいかなと思ひまして、本日は全面的に告白いたします。東大の文学部長室で、三人の教授が一緒だったのです。わたくしの他に、哲学科の岩崎教授と、それから中国哲学の赤塚忠（きよし）教授です。いろいろな話をやっています、もう重要な用件も済んだその後です。懇談の時に、「昔はね、哲学会もこんな具合にいろんなことを一緒にやっていたもんだよ。この頃はどうも行われなくなつたね。」ということ、岩崎教授が言ったのか僕が言ったのか、そこところははっきり覚えていませんが、そうしたら赤塚教授が、「それは岩崎さんが我々を追い出したんですよ。」とずばっと言ったのです。あの温厚な赤塚教授が、そんな厳しいことを面と向かつて言うということで驚いたのですが、そうしたら岩崎教授は、「いやそんなことはない、そんなことはない」と言つて笑ひながら打ち消しましたけれども、今はもう両教授ともこの世におられませんが、それを知っているのは、私一人だからどうしようかと考えたのですけれども、やはりこれは将来の学問の進展のためにね、あえて皆さまに申し上げておこうと、本日決心したわけなのです。この短い会話、分析してみると重要な意味がそこに含蓄されていると思うのですが、それをどう解釈なさるか、それはもう皆様に

お任せいたします。

そこで、比較思想ということですが、国立大学では数年前ならどこでもやらなかつたと思うのです。けれども、そこに至るまでにいろいろの紆余曲折がございましたので、それを申し上げてくれというのが三枝教授のご趣旨かと思うものですから、それも申し上げます。戦後に東京帝国大学が改変されて、新制の東京大学が発給することになりました。東大といつても所詮日本の一つの大学にすぎないから、それを取り上げるといふことはちょっとどうかと思うのですが、しかし日本の大学としては一番古いものだし、それから私が見るところでは、どうも他の大学は東大のやり方に右へならえをしているように思うのです。私立大学ですとよほど独自性が出せると思うけれども、やはりそうはいかない。何故かという、日本の国の成り立ちに由来すると思うのです。つまり、国家権力というものが非常に強いものだから、国立大学は全部中央にコントロールされている。それから私立大学も、その意向を無視しては進められないということがあると思うのです。その証拠には、私学を大いに復活させなければいけないということを私学の方はおっしゃる。私も全面的に賛成なのです。私学こそ独自に進めることができる。けれどもなぜそれが出来ないかという、これはもう申し上げるまでもなく、私学が中央に反抗したいと言ひながら、文部省からみな補助金をもらっているではありませんか。私学の先生に会つて伺ひますと、困るということです。

わずかのお金をくれるのに、手続きがどうだ、書類をどうしろと
言うものだから、そのためには弁護士さんだの経理士さんだの弁
理士さんだの偉い人をずっと頼む。それだけでお金がとんでしま
って、いいことがちっともないというのです。いいことがちっと
もなければ、そんなくだらんものいらなからと、ばーんと蹴と
ばせばいいのだけれども、どこの大学も補助金を蹴とばしていな
いではありませんか。ここに、やはり中央政府にコントロールさ
れる弱みがあると思うのです。これに比して、アメリカの大学、
例えば、ハーバードなどは圧倒的な強みをもっているのです。だ
いたい私立大学の方が強いわけです。ハーバードの予算の全体は、
一時は国連の予算の総額と同じだったそうです。そのくらい力を
持っている。だから、あまり他に気兼ねしないで進めることがで
きる。良い悪いは別としまして。ところが、日本の状態はそうで
はありませんから、殊に、私立大学が発展しようとする、どう
しても寄附金があるわけです。それに対しては、大蔵省がうんと
税金をふっかける。しかも会社の資本金の何百分の一ですか、そ
れを越えてはならないという規定があるのです。うっかりそれを
越えたと税金をうんとふっかけられる。もうがんに擲めになって
いるというのが日本の実状です。だから、どうしても同じような
右へならえになってしまふ。そういうことになりますと、一番古
い国立大学で事を起こしそれが挫折したということも、あるいは
何かお考えになる材料になるかと思ってお話し申し上げます。

新制の東京大学として出発するにあたりまして、教養学部が創
設されました。その一学科として「比較文学・比較文化」が設け
られました。幾人かの教授がおられました。哲学面は川田熊太
郎教授がお世話なされることになり、私にも比較哲学の講義をして
くれというご依頼があったのです。そういう内示がありました。
ところが、それは押さえられてしまったのです。なぜ実現しなか
ったのか。その時の教養学部長の方は敏腕をもって鳴る方でした
が、その方がこう言われるのです。「教授も助教授も四講義以上
はさせないことになっている。中村はそれを受けるとなると数を
越えるから、だからそれはいかん。」というわけです。そういう
規定とか規則というものを持ち出されますと、どうしても引き下が
るより仕方がない。それで川田さんはあきらめられたのです。け
れども後になると、そんなこと嘘だったのです。なぜかという
すぐ後で私は教養学部へ出講させられたのです。文学部で講義し
ているその後に教養学部へ行って、駒場まで行って、印度哲学史
を講義せいというのです。しかも、それを二時間二単位でやれと
いうのです。私は本郷でさえない講義がでなくてまことに申し
訳ないと思っているのに、その上です、ね、駒場へ行ってしかも
短くしたような程度の低い講義をするというのは気乗りしない。
けれどもやはり教授会で決まりになりますと、それに従わざるを
得なかったというのが実状なのでございます。

ところで、時代が進んできますと、東京大学文学部でも、昭和

三七〇八年頃から新しい動きが起きました。つまり、あまり細かに学科が分かれているのは具合が悪いと、今さっき申し上げたようなことを言われる方があったのです。そこで改編の論議がありまして、組織改革、これが大変な時間をとったのです。そっちを進めようという方もあれば、それに反対する方もおられるわけです。いろいろなことが陰となり陽となりましたが、それで結局、改組するというほうが強くなって、だいたいイギリス文学の中島教授、ドイツ文学の手塚教授などが学部長の時にほぼ決ったと思います。どう決ったかと言いますと、全体を締め括りまして、第一類が文化学、それから第二類が史学、第三類が文学・言語、第四類が社会学・心理学、この四つになりました。最初の第一類は、戦争中あるいは戦後には哲学と呼んでいたのです。哲学科として。それは、その頃、社会学の戸田貞三教授が「あまり細かく分かれているのはよくない、第一、学生が就職の時困るだろう。」というようなことを言って、そして戸田先生一流の腕力でもって四つにすることに断を下ろされたのです。ところが昭和三十七年ころには、腕力を持ったレスラーがいなかったせいかどうか知りませんけれども、長い論議の後に四つにまとまったのです。そして第一類というのは、古い呼称で言えば哲学なのです。ところが、哲学というのはやめようというのです。それは、卒業生が何科を出たか、哲学科を出た、そうすると、哲学科——顔色は青白くて目がぎょっとして頬がこけていて、神経衰弱にでもなりそうな、今

にも自殺しそうな、そういうのを世間では連想するというのです。そうしたら就職口なんてありゃしない。内容は同じなのだから文化学とやろうと、それで文化学としたのです。これは必ずしも羊頭狗肉ではないと思います。外国では、哲学の研究を社会科学の中に入れているところがあります。中華人民共和国ではそうです。それから、ニューヨークに、新しい学問の行き方を追求するという New School of Social Sciences というのがあります。その Social Sciences の中では、いろいろなことをやっているのです。だから「文化学」というのは、羊頭狗肉ではないと思います。そのようなわけで文化学としてずっとやってまいりました。そこで思いきり改革をするのだということで、内部事情がありまして、私がたまたま学部長をやることになりました。

私としては、改革が始まったこの好機だから、このチャンスを利用してはなるものかと思ひまして、そこで、こういう講義を自分で始めたのです。昭和三九年度の第一類文化学の一般講義に、講義題目として特殊講義「思想史における問題設定」として毎週二時間二単位夏学期のみ。そして「インド哲学梵文学および宗教学・宗教史学課程の単位となすことを得」と書いてあるのです。何のことかわからない題でしょう。「思想史における問題設定」。しかし問題意識を持っている方はすぐわかるんです。私は、比較思想とか比較哲学という名前は避けたのです。うっかりそんな名前を出すと、反対する側の人から意見を出されると教授会が混乱

してしまふ。あっさり通したほうがいいと思ひまして。それで私はこういう題で講義をしました。次の年度も同じであります。続講として。あまり聴く人はいませんでした。はつきり覚えていませんが十数人位でしたか。それから昭和四〇年度になりますと、講座外の講義をその頃設けたわけです。無理をしまして、お金を工面してきまして。それには、末木助教と泰本講師に「比較論理学」というのでやっていただきました。末木さんはその時教養学部助教という地位をもつていらした。だから末木さんを出す分にはちょっと反対できないだろうと、私は見たわけです。毎週二時間二単位冬学期のみ。「哲学・印度哲学・印度文学専修課程の単位となすことを得」となっております。私がそれと並んで別に「思想史における問題設定」をやはり講義しておりました。昭和四一年度は、その他に思想史関係の講義の一つとして泰本講師の「比較論理学」というのがあります。昭和四二年度には、末木教授が「比較論理学」をやつて下さいました。それから昭和四三年度には、「文化交流および比較文化関係講義」という一つのグループを作りましたから、そこで三枝講師に特殊講義「比較思想論」というのをお願いしました。毎週二時間四単位となっております。三枝博士が「比較思想論」でやりたいと言われたから、よしそれでひとつやつてもらおうと思つて、私はその題で持ち出したわけなのです。それは異論が出てたかれるかもしれない。しかしたたかれる当人は教授会に出ていないのだから、これは構

わないと思ひまして、三枝氏の勇気を大いに賞したわけなのです。そうしてやつていただきましたら、これが大いにへんな評判でして、出席者が非常に多かつた。それで私は喜んだわけでございます。昭和四四年度にも、今度は思想史関係の講義として三枝講師の「比較思想論」、冬学期二時間二単位というのがございます。ただこの頃から学園紛争が始まつたので、講義題目のリストを作つて配ることができなくなつたのです。それで追捕別冊のような形で挙げられています。つまり、四月までに講義題目全部を作成することができなかったでしょう。

ところで昭和四五年からそういう講義がなくなつてしまつたのです。私は昭和四八年まで東京大学におりました。その間を調べてみますと、比較思想関係の講義はないのです。という意味は、学園紛争たけなわで、それがちよつと収まりました。収まつたけれども、どうもあの収まり方に私としては納得がいけないものだから、もう今さら時間をかけて、どうしようという意欲がなくなつたわけなのです。私はあのような収まり方はよくないので、やはり筋を正すべきことはきちつとやるべきだということを主張いたしました。場合によつては、まとまりがつかないなら大学を解体したつていいと、筋を守るのが先だというのが私の意見でございます。いよいよ占拠していた連中が解散させられまして、印度哲学研究室へ何年かぶりに入つてみました。そうすると入口に大きく書いてあるのです。「大学を解体せよ。中村発言」と書

いてあるのです。そういう妙な所で全共闘と私は一致したのであります。それから大学院では、「比較文学比較文化専門課程」という専門課程があったのですが、私はそれには参与してはおりません。つまり、別のものができたからもう他の人は関係してはいかんというわけです。

総じてその当時の学科のあり方というものがどうも学問の進展を疎外している。セクシヨナリズムが学問の進展を妨害していることは私は度々申してまいりましたが、今よく考えてみますと、セクシヨナリズムだけではないです。学界におけるカースト制度です。これを破らなければいけない。カースト制度というのは、一つの学科なりあるいは一つの課程を出れば、ずっとそのレヴェルだけでいつまでも伸びていく。あとは勉強しなくていいのです。それで職が確保される。そのカーストに属していないといくらできても地位は得られない。

さてわたしは大掛りな意見を述べてどうこうしていただくことはとてもできないと思ひまして、財団法人「東方研究会」を作りました。それは昭和四五年のことでありまして、文部大臣から財団法人の許可をもらいました。これは財のない財団法人。財のない財団法人という意味では天下一品だと思ひます。昭和四八年の三月に私は定年で辞めました。それ以後のことは、私が責任をもって申し上げることはできないのでありますが、比較思想の講義は、残念ながら、東京大学文学部ではそれ以後なされてい

と思います。

しかし、他の方面で芽が出て育っていった。その一番良い例は、筑波大学比較思想コロキウムから『比較思想の途』というのが刊行されました、一九八六年までに五号出されました。これで、監修者三枝充恵氏の退官を飾ることになるのではないかと思います。これは大変なお仕事だと思って深く敬意を表します。なにしろ予算などは全然ないのでから。それから本部へ行ったりしてくれやしません。これはやはりひとえに三枝教授の諸方面における信望のいたすところであります。比較思想をやった方は、世間的には恵まれないもので、いろいろ例を知っておりますが、亡くなった方のことなら申し上げていいかと思ひます。蓮見俊光さん、この学会の会員でした。昭和五九年三月一七日に逝去されました。上智大学哲学科の卒業でパリ大学の哲学博士の学位を持っていた方で、熱心にこの会には出ておられました。英文の著作があります。英語・独語・仏語、実に自由闊達な人でございました。なんとかしてあげたいと私は思っていたのですが、最後にはある大学で地位を得られました。いつか真冬に入院したから私に来てくれと言われるのです。私は老人で冬に出ると必ず風邪をひくものですからつい用心していたら、後で聞きましたら河田町の東京女子医大で息を引きとったということで、ああ悪かったなと思ったのですが、いくら出来ても学界では迎えられない。それは日本のカースト制度に属してないからです。だから一向に進展しませんでした

も、国立大学では、この筑波大学で比較思想の講義を始めて下さった。それからあと信州大学でも始められたということを伺っております。私立の大学では諸方面でその試みがなされているように聞いております。ただ国立大学はそんなことでございました。

しかし世間の人は、比較思想的な扱いというものを圧倒的に要求するのです。大学教授が答えていないというだけなのです。

その一例といしましては、東京書籍株式会社で高校の倫理社会の教科書を出しています。その一部に思想史があるわけです。それを、亡くなりました方ですけれども、阿部仁三さんという幹部の方が、思想史といってもばらばらでなく一体になったものを書いてくれと言われたんです。ところが別の幹部の方が反対したのです。なぜかといいますと、第一そんなやり方でやったら上級学校の受験に合格しないわけでしょう。それから参考書がないというんです。なるほどなと思いました。そこでやはり本を書かなければいけないと思って、私、急ぎまして、『世界思想史』七巻を春秋社から出したわけでした。まためたのは以前でしたけれども定年退職した後で刊行されました。それから、その英語版がありまして、講談社インターナショナルで出して下さいました。それをやっていた方は足沢禎吉という副社長の方です。学者といろいろな企画や相談をする。私も何遍も会ったことがあります。堂々と応対しているのです。だから大学を出た人だと思ったら、後でお葬式に行ってみて学歴を伺ってびっくりしたのです。小学校

を出ただけだということです。それでも勉強している人は学問的な分野で優に学者と応対できるということです。その方がマヌスクリプトがあるなら出してやろうと言って下さったのです。講談社インターナショナルで一度刊行され、その新版がロンドンのRoutledge and Kegan Paulで一九八六年に刊行されました。

私が辿ってきた道を申し上げるとそんなことで、それは東大に關してのものです。東大関係でも玉城康四郎博士、三枝充恵博士、末木剛博教授、その他本部の峰島旭雄教授、諸方面の方々がこうやってどんどん推進されるので、社会的には立派な花を咲かせているということが言えると思います。

それからその重要性を認めてくれたのは放送大学です。放送大学ができました時に、藤田健治博士が理事長でしたが、中心人物で、私にこう言われたのです。「哲学は俺がやる、君は比較思想論をやってくれ」と。そうすると、哲学と比較思想論とがウエイトを同じように見られる。これは大変なことだと思ひまして、しかも新しい分野をテレビでやるというのは、これはやりがいのあることだと思ひまして、あえて受けたのです。その頃は放送大学の放送局がありませんでしたから、テレビ朝日で全部録音されました。一ぺん録音しておくと、何年間か大丈夫だということです。中味がそう古くなるということはありませんから、経済なんかと違って。それで私が安心していましたら、今度放送大学が始まると、またやり直すというのです。私は、前にテレビのビデオがあ

るじゃないか、あれを使つたらいいでしょうと言うと、いや困る、あれは機械が違うと言うのです。今度の放送大学では使えないというのです。やれやれと思ひました。しかし同じことをまたやる気はしないのですから、そこで私は放送大学に条件をつきつけたのです。もう俺みたいな老人は駄目だ、若い人がいっぱいいるから、これを皆ひき連れて行くから、十五回連続だそうだが、一回毎に違った人によつてもらう、これでいいかと言つたら、しぶしぶ承諾してくれました。それでも最初の五分だけは私に何か言ってくれというので、それならそれぞれの人の紹介にして、大いに若い学者をほめ称えると言つたら、それを長くやつてもらつては困るとか、なかなかうるさいことを言ひました。とにかくそれを引き受けまして、私としても難行苦行でした。そんなことに時間を取られたくないものですから、千葉の検見川だかに行きまして十五回の録音を一日で全部やつてしまつた。やはり疲れましたけれども、それでとにかく放送大学講師が十五人誕生したわけです。若い人には刺激になり励みになったかとひそかに思つて喜んでおります。

主として思想史の立場から比較思想論というのを取り上げました。しかし、それだけではやはり不十分だと思ふのです。だいたい日本における学問的研究というのが、明治・大正・昭和を通して歴史主義だつたと思ひます。やはり歴史主義の限界というものがある。歴史を越えた真理というものを哲学なり宗教はもつてい

る。それを明らかにしなければいけない。これは根底から考え直さなければいけないと思つて、まず考えるということの基は何かというところ、これは論理学でしょう。だから私は今、比較論理学ではない、論理学の問題にぶつかるといふことをやつておりまして、『現代思想』という雑誌が毎号書けと迫つてくるものですから、大急ぎで半年位まとめまして原稿を渡したわけです。この間手紙をもらひまして、これでまず年末まで大丈夫ですと言われまして、私は救われたような解脱の気持でここへ伺つたようなわけなのです。

ついで、個人的に経験したことを狭い管の中を通してみるようなことを申し上げまして、大変失礼致しました。三枝教授が本日でここでのような形にもつてきて下さつたわけですが、それまでには非常に複雑な難渋な苦渋に満ちた前段階 *Vorstufe* があつたことを申し上げまして、今後皆様の力によって本当の意味の思想研究というものが始まる、それを切に期待いたしまして、私の拙ない講演を終えることに致します。どうもご清聴いただきましてありがとうございます。

(なかむら・はじめ、インド哲学・仏教学、

比較思想学会名誉会長)